

生活習慣病とアンチエイジング

— 生活習慣病と機能年齢・老化バイオマーカーとの相関について —

医療法人アエバ会 アエバ外科病院₁ 四ツ橋診療所₂
 同志社大学大学院医学研究科アンチエイジングセンター₃
 草野 孝文₁ 安井 潔₂ 米井嘉一₃

【目的】生活習慣病が機能年齢・老化バイオマーカーに及ぼす影響について解析した。

【方法】対象は2006年6月から2013年12月の期間、当院でアンチエイジング(健康長寿・抗加齢)ドックを受診した男性156名(平均年齢62.7±11.6歳)、女性137名(平均年齢65.3±12.4歳)の計293例である。臨床検査データ分析より年齢相関のある老化バイオマーカーを調べ、高血圧症・糖尿病・脂質異常・メタボリック症候群(MetS)が機能年齢などの老化バイオマーカーに及ぼす影響について多変量解析で検討した。

【結果】筋・脳・血管・ホルモン・骨の各機能年齢は実年齢と相関があり、老化バイオマーカーとしては握力・基礎代謝・DHEA-s・DHEA/コルチゾール比(D/C比)が負の年齢相関を示した。WCST反応時間・指尖加速度脈波速度(AP)・体脂肪率が正の年齢相関を示し、女性のIGF-1・エストラジオール・骨密度(BMD・腰椎DEXA法)が負、ホモシステイン(HC)が正の年齢相関を示した(p<0.0001)。高血圧症は筋年齢(オッズ比Od.=1.05、p<0.05)と脳年齢(Od.=1.02、p<0.05)を老化させ、握力(Od.=0.92、p<0.01)の低下と、AP(Od.=1.04、p<0.05)を速めた。糖尿病は、血管年齢(Od.=1.04、p<0.05)、脳年齢(Od.=1.03、p<0.05)を老化させ、骨年齢が若かった(Od.=0.97、p<0.05)。脂質異常症は血管年齢(Od.=1.03、p<0.01)の老化と、AP(Od.=1.03、p<0.05)を速め、骨年齢(Od.=0.98、p<0.05)が若かった。MetSは血管年齢(Od.=1.03、p<0.05)を老化させ、AP(Od.=1.07、p<0.01)を速め、体脂肪率(Od.=1.07、p<0.0001)を増加させ、骨年齢(Od.=0.96、p<0.01)が若かった。

【結語】機能年齢など老化バイオマーカーは生活習慣病と相関が見られることから、その予防と治療は正しく『アンチエイジング・健康長寿・抗加齢医療』である。

